新見公立大学紀要　第38巻2号
pp. 179－183, 2018

報　告

国際交流活動における学生の学び
－オーストラリア研修報告－

山本　裕子[1)]*・山内　圭[1)]

1）新見公立大学健康科学部

（2017年12月20日受理）

オーストラリアにて2016年度の国際交流活動を実施した。10日間（移動3日）の国際交流活動内容と学生の学びから、今後の活動を推進するにあたっての資料とし報告する。

学生は国際交流活動を通して「文化や生活の違い」「医療の違い」「人と触れ合う中での英会話の楽しさ」「活動を通して親や友人に対する感謝」を学び、気づくことができていた。これらの学びや気づきはグローバル化した世の中で育成・活用していくべき「グローバル人材」の要素を含んでいた。今後もグローバルな視点で学びや気づきがより多くなるよう国際交流活動内容の充実を図っていきたいと考える。

（キーワード）国際交流活動、オーストラリア、学生の学び

Ⅰ．はじめに

近年、社会のグローバル化に伴い、大学教育において国際的に活躍できる能力を身につける教育の必要性が増し、看護学の人材育成においては様々な人の健康生活やニーズに着実に対応できる教育の必要性が増している[1)]。

本学では、国内外での国際交流体験を通してさまざまな国の文化や歴史、医療状況などを学び多様な価値観への柔軟な思考を養うことを目的に、カンボジア、アメリカ、オーストラリアの3か国で国際交流活動を実施している。今回は、3か国のうち3月に実施しているオーストラリアでの国際交流活動の研修内容を学生のアンケート結果とともに報告する。

オーストラリアは日本の約20倍もの面積を持ち、人口約2,000万人の国である。またオーストラリアは、アングロサクソン系、中東系、アジア系、先住民など多民族・多文化国家であり、単一民族で多くを占める日本と比し、多くの人と関わり多くの文化を学ぶことのできる国際交流活動を実施する場としても大変貴重な場である。その他にも日本と異なる教育体制や医療体制の違いを体験的に学ぶことのできる場でもある。文化が違い、日本語の通じない国でどのように情報を得て、どのように学んでいくか学生たちは国際交流活動での経験から多くの学びを得ることができる。また、国際交流活動を通して、学生が英語の学修方法について理解を深め、英語に対する苦手意識が軽減したという報告から、学生自らが課題を見つけ学修していく姿勢を身につけるためにも必要である[2)]。

そこで、今後の国際交流活動を推進するため学生から得られたアンケート調査結果を資料としここに報告する。

Ⅱ．国際交流活動の内容

1．期間

2017年3月20日（月）～2017年3月29日（水）の10日間（うち移動3日間）

2．滞在先

メルボルン：2017年3月21日（火）～2017年3月24日（金）
2017年3月27日（月）～2017年3月28日（水）
の計6日間

カイントン：2017年3月25日（土）～2017年3月26日（日）
の2日間

3．参加者

学生8名（看護学科学生4名、幼児教育学科学生4名）
教員2名（看護学科2名）

4．国際交流活動内容

（1）活動日程

	日にち	滞在地	研修内容
2日目	3/21(火)	メルボルン	・メルボルンへ到着 ・メルボルン市内を半日観光
3日目	3/22(水)	メルボルン	・メルボルン市内研修
4日目	3/23(木)	メルボルン	・The Royal Children's Hospitalの見学 メルボルン大学内見学
5日目	3/24(金)	メルボルン	・Gardenvale小学校訪問 東洋医療クリニック訪問
6～7日目	3/25(土) ～3/26(日)	カイントン	・ファームステイ 学生：4名1組2グループ 教員：2名1組
8日目	3/27(月)	カイントン→ メルボルン	・自由行動

※国際交流活動の詳細な内容は以下の本論で述べる。－

*連絡先：山本裕子　新見公立大学健康科学部看護学科　718-8585　新見市西方1263-2

（2）主な活動内容

例年は語学学校へ留学し午前中は語学の学修をしているが本年度は同校の研修受け入れ最小人数に満たなかったため受け入れ困難となり、メルボルン市内の見学活動とファームステイを計画し実施した。1日目、9日目は移動、2日目は半日のため活動内容は省く。

3日目：学生と教員で行先を決め、メルボルン市内を走る無料トラムや電車を使用し目的地へ向かうという体験をし、現地の生活に慣れていった。その他にも昼食や夕食の際には英語を使い注文をすることや道がわからない場合は現地の人へ尋ねるなど生活を送る中で異文化を体験していった。

4日目：病床数250床、年間入院患者約35,000人のメルボルンで最も大きい子ども病院The Royal Children's Hospitalの見学。そこで2名のホスピタルクラウンと出会い、外来で受診を待つ子どもたちと一緒に会話をしたり、折り紙、塗り絵などをし時間をともに過ごした。ホスピタルクラウンとは、つらい入院生活を送る中で、本来の子どもらしさを失いがちになっている子どもたちに笑顔を届けるため日々病院で活動している職種である[3)]。

5日目：Gardenvale小学校を訪問し、日本語クラスの授業の見学と子どもたちへ日本語や日本の文化（折り紙）を教えるという体験をした。折り紙を使用し動物を作る際は、子どもたちからの質問に英語で答えようと奮闘する学生の姿や、また言葉だけでなく子どもの表情や動作から言いたいことや気持ちを察し、それに対し行動で答えようと奮闘する学生の姿が見られた。

Gardenvale小学校訪問の後は、東洋医療クリニックShen Healingへ向かった。そこでは、オーストラリアにおける東洋医療の位置づけや実際に鍼治療を施してもらうなどの体験をした。検査だけでなく人の体、例えば舌の色などからその人の体調を判断していくなど人をしっかり診て判断していくことができることへの驚きと大切さを学んだ。

6~7日目：6日目から2日間カイントンにてファームステイを実施。学生8人を各グループ4人ずつの2グループに分け、ホームステイをした。体験したことはホームステイ先により異なるが、農作業の手伝いや馬や牛、羊などへのえさやりなどオーストラリアの自然をたくさん経験した。その他、ホストファミリーと夕食作り、散歩など楽しい時間を過ごした。

8日目：自由行動にて、各自でShopping、観光などそれぞれに行動。

5．アンケート調査の実施

時期：国際交流活動後に実施（7月実施）

内容：学生の属性、研修前後の英語力について、研修前後の意識の変化・理解度（文化、教育、医療）、研修実施時期や期間について、それぞれの国際交流活動についての満足度（病院見学、小学校訪問、東洋医療クリニック訪問、ファームステイ）を選択式、研修への参加のきっかけ・研修での学びを自由記述で回答を求めた。

対象者：参加学生8名

実施方法：e2surveyを使用したオンラインアンケートにて実施。アンケート調査への依頼はスクールネットにて行った。

Ⅲ．アンケート結果

研修に参加した8名全員より回答が得られた。

1．参加学生の属性

参加学生は看護学科学生4名、幼児教育学科学生4名 の計8名であった。全員年齢は19歳であった。参加前の英語に関する質問の結果を図1、図2に示す。「英語が好きである」に「非常にあてはまる」「ややあてはまる」と回答したものは5名（62.5%）であり、英語力については読み書きと会話について尋ね、「どちらもできない」と回答したものが半数と英語は好きであるが実践には結びついていない状況での参加であった。これまでに取得している英語の資格は、実用英語技能検定3級～2級を5名（62.5%）の学生が持っていた。

図1　英語に関する質問

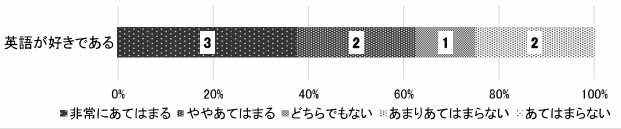
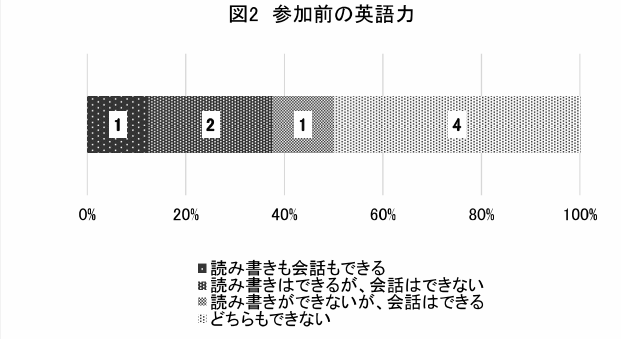


図2　参加前の英語力



2．参加のきっかけ、研修前の準備

今回の国際交流活動への参加のきっかけは、「異文化に対する興味があったから」「自然豊かなオーストラリアへ

行ってみたかった」「海外に行くことで少しは英語に興味が持てるのではないかと思った」「海外で英語を話してみたいと思った」などが挙がった。

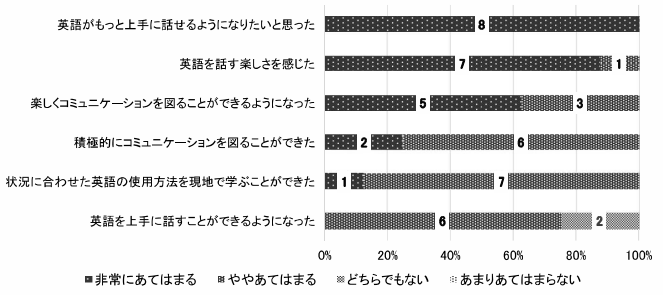
国際交流活動前の準備では、自身の目標を明確に持ち参加した学生7名（87.5％）、自己学修をした学生6名（75.0％）と大多数が目標をもち、事前学習をして参加していた。自己学修の内容としては、「英単語の学修」「日常会話の勉強」「英語のテキストの見直し」「メルボルンについて調べた」「リスニング」などが挙がった。

３．オーストラリアでの経験

（１）コミュニケーション

結果を図3に示す。「英語を話す楽しさを感じた」では、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」と全員が回答し、「英語がもっと上手に話せるようになりたいと思った」では、「非常にあてはまる」と全員が回答していた。また、「英語が上手に話すことができるようになった」では、「ややあてはまる」6名（75.0％）、「楽しくコミュニケーションを図ることができるようになった」「積極的にコミュニケーションを図ることができた」「状況に合わせた英語の使用方法を現地で学ぶことができた」では、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」と全員が回答していた。

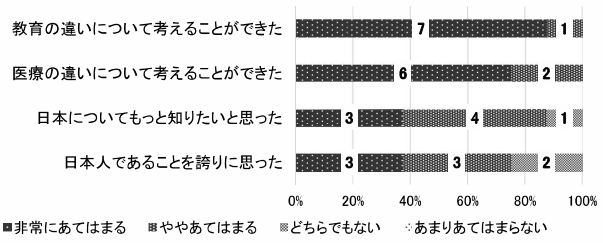
図3　コミュニケーションについて



（２）異文化への理解について

「異文化を体験できた」「異文化についてもっと知りたいと思った」「オーストラリアの文化を学ぶことができた」「オーストラリアの暮らしについて学ぶことができた」では、「非常にあてはまる」と全員が回答した。以下は図4に結果を示す。「オーストラリアと日本の医療の違いについて考えることができた」「オーストラリアと日本の教育について考えることができた」では、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」と全員が回答し、「日本についてもっと知りたいと思った」では、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」7名（87.5％）、「日本人であることを誇りに思った」では、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」6名（75.0％）であった。

図4　異文化への理解について



（３）国際交流活動内容への満足度

「The Royal Children's Hospitalへの見学」「小学校訪問での交流活動」「東洋医療クリニックでの交流活動」「ファームステイでの経験」では、全員が「満足」と回答した。「ファームステイの期間」では、7名が「満足」と回答するも1名は「どちらかといえば不満」と回答し、「もっと滞在したかった」という意見が挙がった。

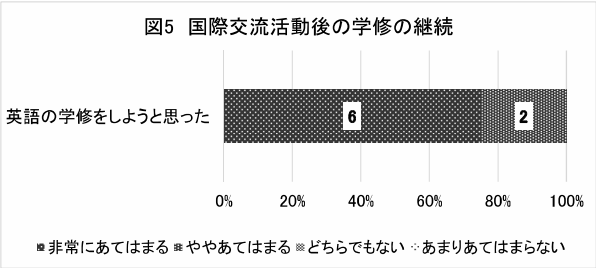
（４）国際交流へ参加後の学びの内容（自由記述）と学修継続の有無

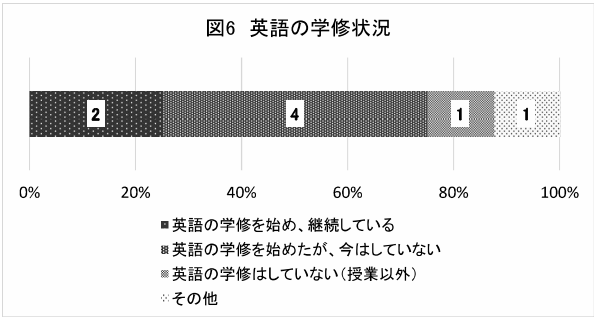
学生の学びをカテゴリー化し表1に示す。学生は国際交流活動を通して「文化や生活の違い」「医療の違い」「人と触れ合う中での英会話の楽しさ」「活動を通して親や友人に対する感謝」を学ぶことができていた。

国際交流活動後の学修の継続については、図5、図6に示す。「国際交流活動後、英語の学修をしようと思った」という質問では全員が「非常にあてはまる」「ややあてはまる」と回答し英語への学修意欲が高いことがわかった。しかし、その後の取り組みとして国際交流活動後4カ月の時点で「英語の学修を始め、継続している」は2名（25％）と少なく、「英語の学修を始めたが、今はしていない」が4名（50％）と一度は学修したが継続には至らなかったケースが多かった。

表１　国際交流活動へ参加後の学びの内容

カテゴリー	学生の記述
文化や生活の違い	日本で当たり前に思っていたことが、当たり前ではないと改めて感じた。
	日本ならではの文化にも気づき、日本に生まれたことを誇りに思えるようになった。
	オーストラリアと日本の文化の違いを学べた。
	日本の良さ、オーストラリアの良さをそれぞれ感じることができた。
	ファームステイでは農家の生活に触れることができた。
医療の違い	小児科に行くことで日本との違いなどを学べた。
	東洋医学クリニックでは東洋医学について興味を持った。
人と触れ合う中での英会話の楽しさ	今までやってきた英語が全然通じなかったが、他国の人とコミュニケーションをとるのは楽しかった。
	英語に関しては不安だったが、オーストラリアの人の温かさを感じ、安心して積極的に話すことが出来た。
	現地の方とコミュニケーションは徐々に慣れてくるとコミュニケーションをたくさんとりたいと思うようになり、道を聞いたり写真を一緒に撮ってもらったり、自分から英語を話す
	日を追うごとに英語が聞き取れるようになっていることも実感することができた。
	コミュニケーションをとりたいという気持ちが一番大事なのだと身をもって感じた。
	ファームステイでは英語を話す機会も多く、話せなくても伝えようとすれば相手に伝わる事を改めて感じた。
活動を通して親や友人に対する感謝	いろいろな経験をさせてくれた親への感謝の気持ちが一番大きかった。
	みんなで協力して話そうとしたところが良かった。





4．今後の研修に向けて

（1）国際交流活動（期間、時期、参加人数など）への満足度

国際交流活動への満足度では、「期間」については全員が「満足」「やや満足」と回答し、時期については全員が「満足」と回答した。参加者の人数では「丁度良い」が6名（75%）、「やや少ない」が2名（25%）であった。

（2）今回の国際交流活動で不安に思ったこと・困ったこと

国際交流活動で学生が不安に思ったことは「言葉」「体調管理」「治安」についてであり、実際に困ったこととして「言葉が通じなかったこと」「慣れない環境に体調が悪くなりがちであったこと」が挙がった。

Ⅳ．考察

今回のオーストラリア研修は従来行っていた語学学校での研修活動に代わりファームステイを取り入れるという内容を一部変更しての実施となった。

今回、国際交流活動へ参加した学生の多くは英語に興味をもち、参加前の事前学習へも取り組み参加していた。学生はオーストラリアへ行き、実際に現地の人とコミュニケーションをとっていくことに不安を抱き、実際に伝えたいことが伝わらずもどかしい思いを経験していたが、日に日に英語が聞き取れるようになり、積極的に話せるようになった自身の成長に気づき国際交流の楽しさを感じていた。そして、これらの経験が「英語をもっと上手に話せるようになりたい」という学生の意欲へつながり、帰国後の英語への取り組みへつながっていた。しかし、帰国直後は取り組んでいた英語の学修が数か月後には継続できていない状況が明らかとなり、これには今回の参加学生が看護や幼児教育を専攻する学生であり、帰国後の4月から専門科目の授業が多くを占め英語を学ぶ時間を取りづらくなったという現状が考えられた。

異文化への理解では、病院見学、小学校見学、ファームステイでの経験から日本とオーストラリアにおける文化の違いや生活の違いを感じていた。オーストラリアと日本では教育体制、医療体制など多くの違いがある。これらの違いを10日間という短い期間で全て理解することは難しいが、今後多くの人を対象とする看護職や保育士を目指す学生にとって、多くの価値観が存在することや視野を広げて物事を捉えていくことの必要性を学ぶ大変貴重な体験になったことだろう。

国際交流活動では、文化や生活の違い、医療の違い、人と触れ合う中での英会話の楽しさを学べること、さらには参加させてくださった家族や一緒に参加した友人へ感謝する気持ちが持てるなど学生にとって良い学びや気づきの場となっていた。語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーの要素を兼ね備えた「グローバル人材」が求められる中、国際交流活動でこれら全てのことを提供することは難しかったがこれらのうちいくつかの点において学生へ気づきときっかけを与えたことは確かである[4)]。今後もこのような場を学生へ提供し、学びや気づきがより多くなるよう国際交流活動内容の充実を図っていきたいと考える。

Ⅴ．今後の課題

学生の不安や困ったことに関して言葉の問題や体調、治安の問題が挙がった。言葉の問題に対しては授業で行っている英会話の学修に加えシミュレーションを取り入れるなど事前学修方法の工夫を行い、渡航時の体調不良に関しては環境の変化から体調を崩しやすいなどの情報提供をこれまで以上に徹底していくこと、そして体調不良時の対応についてより詳細に伝達する必要があると考える。治安の問題については外務省などから治安情勢の情報を得るとともにそれらの情報に早急に対応し、安全を第一に考えた国際交流活動の場の選択を行い、そして安心して国際交流活動へ参加できるよう学生と家族へ情報提供を行うことが必要であると考える。

海外研修によって学生の英語への苦手意識が軽減し、学修方法の理解が深まるという報告があるように本学の学生も国際交流活動後に英語の学習を始めたものが半数以上いた[2)]。しかし、その数か月後には継続できていないと

いう状況があり、今後は学修を継続していけるよう学ぶ環境の整備を行っていく必要があると考える。

文献

1）文部科学省「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm（アクセス日：2017.11.26）

2）香月毅史，荒井淑子，「看護学生の短期海外研究における英語学習に関する意識調査」，上武大学看護学部紀要，第5巻，第1号，12-18，2009.

3）日本ホスピタル・クラウン協会，http://www.hospital-clown.jp/about.html（アクセス日：2017.11.26）

4）文部科学省「グローバル人材育成推進会議　中間まとめ」，http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/110622chukan_matome.pdf（アクセス日：2017.12.1）

Learning of the Students who Participated in International Exchange Activity -A Report of Study Tour to Australia-

Yuko YAMAMOTO, Kiyoshi YAMAUCHI

Department of Nursing, Faculty of Human Health Sciences, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

Niimi College had Study Tour to Australia and the authors escorted the tour. This paper aims to report the international tour and what the student learnt through the tour so that we may be able to have better study tours.

We have found out that through the international study tour the students learnt “differences in cultures and life styles,” “differences in medicine,” “enjoyment of communication in English” and “gratefulness to their parents and friends noticed through the activity.” These learnings are important in the global age and should be nourished so that the students will be global citizens. With this analysis, we would like to further improve our international study tours and international exchange activity.

Keywords: international exchange activity, Australia, learning of students